



# ～輝きの子育て～

## 「静かな有事」が進行中



先に、日本の人口減少の問題について書いた。その人口問題について刺激的な問題提起をした本が出版された。「未来の年表」(講談社現代新書)河合雅司著 ～人口減少日本でこれから起きること～ である。

本のオビに	2020年	女性の半数が50歳超え
	2024年	全国民の3人に一人が65歳以上
	2027年	輸血用血液が不足
	2033年	3戸に1戸が空き家に
	2039年	火葬場が不足
	2040年	自治体の半数が消滅
	2042年	高齢者人口がピークに

と衝撃的な文字が踊っている。この本の内容を紹介したい。

著者は、日本の喫緊の課題は ①出生数の減少 ②高齢者の激増 ③勤労世代(20～60歳)の減少に伴う社会の支え手の不足 ④これらが互いに絡み合っ起こる人口の減少であると指摘する。

少子化は、警察官、自衛隊員、消防士と言った「若い力」を必要とする仕事の人員確保に容赦なく襲いかかる。国防や治安、防災機能が低下すれば社会の破綻に直結する。

2050年頃には、国土の約2割が無居住化すると予測される。スカスカになった日本列島に、外国から大量の人が移り住めば、武力なしに実質的に領土が奪われることとなる。

人口減少にまつわる日々の変化はわずかで、影響を感じにくい。従って、人々は無関心である。これこそが問題の真の難しさである。ゆっくりであるが、真綿で首を絞められるように確実に日本国民の一人一人の暮らしが蝕まれてゆく。この事態を著者は「静かな有事」と名付けている。

人口推計から導きだされる事態は時間的な前後の誤差や地域による濃淡はあるにせよ、ほぼ間違いないと当たるものである。

この「静かな有事」に対応するには長い期間をかけた改革が必要となる。今、手を打たないと日本が減じる事態となることは明白である。

では、その対応策は何なのか。

著者は、拡大路線でやってきた従来の成功体験と訣別し「戦略的に縮む」ことであるという。

日本よりも人口規模が小さくとも豊かな国はいくつもある。戦略的に縮むには、多くの痛みを伴う改革が迫られるだろう。現在の拡大路線に合った国家の構造の「作り変え」を成功に導く必要である。

世界にはまだ手本はない。国民、政治家が人口減少社会の実態を正しく認識し、共通の基盤に立った方向性を出してゆかねばならない。少なくとも成功するまでは各政党の政策が不一致では覚つかない。国民も我慢が必要である。

ここに、類い稀な指導力を持った政治家が現われるなら強権的な独裁者であっても、日本がなくなる為には受け入れる覚悟も必要になってくるかも知れない。

著者は、日本を救う10の処方箋を提案している。詳細は本書にゆずるとして、代表的なものを3～4つ紹介したい。

- 1 高齢者の削減  
決して殺してしまう訳ではなく、「高齢者」の定義を現在の65歳以上から75歳以上にし、社会の支え手を74歳以下とする。
- 2 24時間社会から脱却する。便利さの為に人手が掛っている。
- 3 非居住エリアの設定  
少数の人のための行政サービス、インフラサービスは行わない。  
非居住エリアに住みたい人は、それ相応の負担増をして貰う。
- 4 国際分業の徹底  
何でも made in japan はやめる。(例えば酪農はやめてしまう。)  
得意分野だけに絞る。 等々

以上であるが、どれをとっても大変な抵抗のあるものばかりである。25年ぐらいかけて国の仕組みを大きく変えないと日本はなくなるという危機にあることが、人口動態から浮き上がっている。

片野 英司

参考 「未来の年表」(講談社現代新書)  
～人口減少日本でこれから起きること～ 河合雅司著